わいわい、がやがや、みんなで哲学
場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」
第144号
2020年7月

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行　（主宰:吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp）

特集「コロナ問題をテツガクする」（続）

写真：大森徹治さん（ダイバー歴31年）
＊富士宮市に単身赴任：沼津市・大瀬崎にて撮影
＊ソーシャル・ディスタンス(ソラスズメダイ)

いま私たちは、新型コロナウィルスの世界的蔓延の渦中にいます。100年に一度と言われるこの未曾有の体験をどう見つめ、考えたらいいのでしょうか。さらに、自分の個人的体験としてだけでなく、歴史的経験として共有し、記憶し、記録し、伝えていきたいものです・・忘れてはならない「記憶のエチカ(倫理)」として。
この特集（続）も、その素材の一つとなれば幸いです。

吉田千秋（主宰）から

＜ほんとうの相手はコロナではなく、誤った方向へ導く権力者たち＞

沖縄慰霊の日6月23日に、高校生の高良朱香音さんが落ち着いてしっかりと訴えました・・「あなたが見つめた希望の光　私は消さない　消させない　梅雨晴れの午後の光を感じながら　私は平和な世界を創造する・・」

もう二度と、あの暗闇の世界、戦争の時代に戻してはならない。光り輝く明るい平和な世界を創るのだ。この声は、新型コロナ危機の渦中にあって、もっとも大切な課題を示していると思われます。

しばしば指摘されているように、「コロナとの戦争」という表現、認識はまちがっています。コロナが人間に戦争を仕掛けてきたのではない。人間が自然破壊を繰り返す中で新たな感染症を引き込み、パンデミック（爆発的感染）をもたらしたのです。もちろんこの状態を終息させる様々な手立ては必要です。だが、それは「戦争」ではない。コロナと人間は殺し合って勝ち負けを決めようとしているのではないのです。

戦中派の人が新聞投稿で語っておられたが、コロナも怖いが、空から降ってくる焼夷弾はもっと怖かった。そして、何よりも怖かったのは、「国家中枢の方向を誤った意思」だと。いま日本だけではないが、国家の指導者・権力者たちの多くは手を取り合うよりは、「自国の利益」「自分の権力」のみに固執し、醜い争いを行っています。

その結果はすでに明らかなように、権力者と結びついた大企業・富者をますます肥え太らせています・・何と日本の大企業の内部留保金は約463兆円！）。その一方で、貧困・差別・障がいに苦しむ人たちのいのちはますます軽んじられ、日々のくらしを苦境に陥れています。コロナがこれをもたらしたのではなく、権力者たちの無策・愚策・失策・私利私欲がもたらしたのです。

（八百津町・五宝滝）

だから、私たちが相手にしなければならないのは、こうした権力者たちの自分勝手な誤った政治であり、医療システムを壊してきた新自由主義経済政策であり、その根っこにある飽くなき利潤追求をはかる資本主義体制ではないだろうか。

すでに多く人たちがこのことに気付き、大きく声をあげだしています。アフターコロナに見出すのは、権力者たちの声高な「勝利宣言」ではなく、一人ひとりのいのちとくらし、へいわをめざす人たちの力強くて静かな「連帯宣言」にしたいものです。

2020．7．1　主宰：吉田千秋

＜お礼とお知らせ＞

- 今回も特別投稿をはじめ、皆さんから多くの投稿を頂き、充実した内容になりました。さらに、運営資金への協力も頂きありがとうございました。
- 今回の表紙写真とカットの水中写真は大森徹治さん撮影のものです。ありがとうございました。他の花のカット写真は、前回に続き、わが家の庭の花を撮ったものです。
- 8月から12月の第25期例会予定を巻末に示しました。コロナ感染状況もみながらですから、会場や開催時間を前もって特定できません。ご了解願います。

＊前回特集「コロナ問題をテツガクする」の続編を届けます。今回は、主として岐阜在住の皆さんに寄稿をお願いしました。ありがとうございました。

＜特別寄稿＞

安藤征治（あんどうせいじ）
＊哲学カフェ4周年記念講演者「教育改革はどう行うべきか・・大阪府基本条例をめぐって」
＊元中学校教師、前岐阜市教育長、岐阜モンゴル文化協会会長、「ぎふ平和のつどい」実行委員長（3回）

＜見えないものに対する心の在り様＞

新型コロナウイリス感染症がもたらしたものは何か、そしてそれをこれからの社会にどう生かしていくべきか。医療、経済、教育、そして日常生活の行動様式に至るまで、課題は山積である。

コロナは、ウイリスそのものの感染にとどまらず、恐怖と不安、偏見と差別を人から人へと感染させ、人間関係を破壊する恐ろしいものである、とある人が言っていた。

Stay-Home、Social-Distance、マスクやフェイス・シールドの着用、オンライン○○、いずれも人間関係本来の在り方の変容を求めている。

自粛要請により、親しい仲間とも疎遠になり勝ちで、孤独感に陥ることもある。

コロナは目に見えない。見えないけれど存在している。その事実を私たちは先ず謙虚に受け止めなければならない。

現代人はともすると、見えるものの存在のみにとらわれ、見えないものに対する謙虚さを失くしてはいないか。自然災害もさることながら、原発への問題についてもそう思う。ともすると見えない危険に無頓着になり、目の前に見える利益や利便性のみにとらわれてしまう。

大正から昭和のはじめにかけて短い生涯を生きた童謡歌人金子みすゞは、「たんぽぽ」という詩の中でこう謳っている。「・・。強いその根は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」 見えない存在に対する絶対的な確信と信頼である。

私たちは目に見えないコロナウイリスに対する確かな認識と、それによってもたらされる見えない人間関係に対する絶対的な信頼を失ってはならない。

学校の長い休校期間中、学習プリントやオンライン授業も大事かも知れないが、見えない先生と児童・生徒という関係の中で、どう信頼関係を結ぶか、ということの方が重要であると私は考えていた。

社会構造の変化や、行動様式の変容以前に、見えないものに対する私たちの心の在り様こそが問われているのだ、と私は思う。そしてそのことは今の為政者たちにも強く求めたいものである。

「**密着**（イソギンチャクを背負うカイカムリ）」

○河合良房（かわいよしふさ）

＊哲学カフェ7周年記念講演者「18歳　選挙権にも少年法にも適用どう思う?」

＊弁護士。自由法曹団団員、日本労働弁護団団員等。「子どもの人権ネットワーク・岐阜」代表、「岐阜総がかり行動実行委員会」代表、「ピースハートぎふ」代表など。

＜新型コロナウイルス禍からの課題・教訓＞

新型コロナウイルスの蔓延は、私たちに多くの課題・教訓を与えた。そのほとんどは、安倍政権の“後手・誤手”すなわち、「初期対応のまずさ」「一貫しない、思い付きの対応、勝手な判断」、また「補償なき自粛要請」、根底にあった「経済優先、オリンピック優先」に起因する。さらには、これまでの「社会保障・医療の切り捨て」も現在の混乱に拍車をかけている。

とりわけ、私は、感染症対策も災害対策も、「準備していないことはできない」という原則を指摘したい。わが国では、検疫法、感染症法の他に、2012年4月には新型インフルエンザ等対策特別措置法が制定された。この特措法は、人権制限や行政権濫用の危険があるものの、発生前から周到に準備し，人員と予算を充当することを求めている。平常時から政府は「政府行動計画」を策定し、地方自治体に示していく義務がある。しかしながら、今回の政府の対応を見ると、これらの準備は全くなされていなかったと言わざるを得ない。

そして心配なのが、このような逼迫した渦中にありながら、安倍首相は「緊急事態に国家や国民がどのような役割を果たすべきかを憲法にどう位置づけるかは、極めて重く大切な課題だ」などと述べ、内閣の権限を強化する緊急事態条項を設ける改憲を「必ずや成し遂げるという決意に揺らぎは全くない」などと、どさくさ紛れに「改憲」を目指そうとしていることである。

さらに、心配なのがコロナ禍という戦々恐々とした社会不安の中で、スマホの持ち主の移動記録を過去に遡って収集したり、感染者の動向を特定したり、駅での利用者数を把握したりするなどリアルタイムで監視していることである。

そして政府は、それをさらに進め、新型コロナウイルスの感染者と濃厚接触した可能性を知らせるスマホの「感染者追跡アプリ」を持たせようとしている。まさに、情報通信技術を駆使した国民監視体制つくりが進められている。感染防止に有効な面もあるが、集めた情報をどう管理し、どう扱い、いつ廃棄するのかなど透明性が確保されなければならない。

「**住処の換気**（ミジンベニハゼ）」

○木戸季市（きどすえいち）
＊岐阜聖徳学園大短大部名誉教授（歴史学）、長崎での被爆者、
＊日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）事務局長、
「岐阜・九条の会」代表世話人　ほか

＜コロナ雑感＞

哲学カフェ通信に意見を寄せられた皆さんに敬意を表します。感銘しました。

今年1月、晴れて80歳になりました。新聞の死亡記事に目がいきます。上と下がほぼ半分、人生の終りが近づいています。同時に仕上げの時です。

そんな矢先のコロナ騒動。NPT再検討会議が延期、予定していたニューヨーク行も中止になり、4月から2カ月の自宅生活、はじめての体験でした。

暇ができ休めるかと思ったら大間違い、常にも増した忙しい毎日。各種のオンライン会議、執筆依頼、国内外からのインタビューなどです。

世界は、今、危機に直面しています。核兵器、気候変動、コロナの危機です。通信に寄せられた意見に耳を傾けなければならないと思いました。ポスト・コロナの社会を考えるとき必要なものは「経済のグローバルの結果として世界的に蔓延した感染症の被害は不均等」という事実に立って、「空間も時間も人手も十分のゆとりを備えた社会システムの構築」、「個人の価値、そして自由と平等を軸に」です。

前号「通信」掲載のひらみつさんの「地球全体が攻撃されているのであれば、地球防衛軍を組織して戦わなければならない。そのため、即急に臨時世界政府を樹立させねばならない」は、我が意を得た意見です。

かなり前に聞いた、恩師井ケ田良治先生の言葉を思い出しました。「これまでの世界は、村（カントリー）の社会から、国（ナショナル）の社会、そしてインターナショナルの社会に変わってきた。インターナショナルの社会（現代）はなお、国を中心にした社会である。これからはユニヴァーサルな社会、人中心の社会、地球一体の社会にしなければならない」というお話でした。

ふと日本国憲法が頭に浮かびました。97条と12条です。「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去幾多の試練に堪え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである」と、「この憲法が国民に保障する自由及び権利は国民の不断の努力により、保持されなければならない」です。

三大危機を克服し、自由由な社会をつくるのは、国民（広く世界市民）の不断の努力にかかっています。

「密集（サバの幼魚の群れ）」

○　多田　滉（ただあきら）
＊日本キリスト教会岐阜教会元牧師、現在 同教会岡崎伝道所
応援牧師、「2018ぎふ平和のつどい」実行委員長など

＜コロナ禍を生き抜くために＞

新型コロナウィルス禍が、この地をもその猛威を晒し始めたのは、確か東濃で活動する女性合唱グループにクラスター発生が報じられた頃だったと記憶します。各地に散在するキリスト教会の礼拝も、いわゆる三密状況下での会衆による讃美や牧師の説教が、同じようなリスクを含んでいます。そこで、多くの教会も、緊急事態宣言下では、礼拝や各種の集会を休止し、テレワークによる遠隔礼拝に切り替えるなどの対応を行いました。世に言う「ソーシャル・ディスタンス」の多様な形の実践です。

私はこういう状況下で、改めて個々人の魂の尊厳を深い所から聴き取る宗教的源泉、といったものを考え続けました。人と人の間に距離を置くことは、感染防止の為の避難姿勢であるとともに、それだけではなく本当に自他の人格を尊ぶ姿勢として、普段の生活にこそ必要だからです。先の大戦下、ナチス支配に抵抗し殉教した神学者のD. ボンホェッファーの言葉、「一人で居ることが出来ない人は、共に居ることに注意せよ。共に居ることが出来ない人は、一人で居ることに注意せよ」を思い出します。世界を揺さぶる疫病に対するに、一人ひとりが自覚的で真の意味の強い心で臨む必要があり、何とかそういう心を養われたい、と願っています。

既に、各方面から「コロナ後」のことが、語られるようになっています。感染拡大を防がねばならない「今」で精一杯だ、ということもあるかも知れません。先走りは戒めながらも、この苦しみを脱け出る先に見えてくる光を探り求めることも、「自粛明け」を持ち望んできた私たちが、限度を超えて強いられる自粛は、人の心を壊わす危険を予感したのも正直なところではないか、と思うからです。

終息後に現れてくる「パラダイムシフト」があるとすれば、そこには弱い立場や、少数の人々が中心に据えられる世界が含まれねばなりません。今までの能力主義や分断を生む自己中心指向では、世界はやって行けない所に来ています。

「コロナ禍」は、そのことを私たちに突きつけたと言えるのではないでしょうか。

「密閉（外敵から身を守るために隠れるソラスズメダイ）」

○　津田正夫（つだまさお）
＊哲学カフェ6周年記念講演者「安倍政権の情報統制とどう向き合うか」
＊元NHKプロデューサー、元立命館大学教授（市民メディア論）、「てにておラジオ」代表理事。著書：『ネット時代のパブリック・アクセス』（世界思想社）ほか。

＜コロナ時代の新しいメディア・リテラシーを＞

この数か月間の「新型コロナ・パンデミック（世界的大流行）」と、それに関するあらゆる情報と報道の洪水、日常のくらしの作法から世界的な政策決定にいたるまで、コロナ情報をどう編集し、どう受け止めるかをめぐって、私たちはおそらく数十年分の経験と知恵を得てきたことだろう。

武漢や「ダイヤモンドプリンセス号」のドタバタ、各地・各国のロックダウンなどから、それぞれの政府の愚かさや賢さが明らかになり、他方で命を賭けた医療従事者や“エッセンシャル・ワーカー”（社会的に不可欠な仕事をしている人たち）の価値、日頃顧みられない人たちの存在や格差の構造も見えてくるようになった。

私たちが浴びてきた情報の教訓を乱暴に整理すると、第一に、政治・経済のあらゆるグローバリズムから身近な“ソーシャルディスタンス”に至るまで「適切な空間とは何か」を考えることの重要性だろう。第二に、感染症の歴史、抗体やワクチンの課題などから、「時間と歴史の感覚」を研ぎ澄まし、「人間の知恵の水準」を問い直し始めたこと。第三に、社会的秩序や制度から排除され/排除している人たち/自分たちの問題、格差・差別の構造が焙り出されてきたこと。第四に、効率や経済中心のこれまでの思考法を見直す中で、深い精神的な世界の価値や、支えあいの意味が共有されつつあることなどだろうか。

テレビのワイドショーの一部は明らかに変わってきている。取材・制作スタッフ自身も巻き込まれる命がけの報道現場の悔しい思いを、僕は何度か聞かされた。また視聴者・市民は、収入途絶の状況や政治的な愚策の中から、ごまかし、宣伝、ニセモノの情報やニュースを見極める力を敏感に身に着けてきているのではないか。自分と世界の危機に関する膨大な情報と報道から、私たちはこれまで政府の宣伝やマスメディアに任せていた価値観や意思決定について、自分で根本から考えなくてはならないことに気付いてきている。情報を取捨選択し、本当に必要な情報や行動の形を自分たちで創っていくメディア・リテラシーが、切実に必要とされる時代にさしかかっているように感じられる。

「外出自粛
（コケギンポ）」

○　**平井花画**（ひらいかえ）
＊ファッションデザイナー、岐阜県ユネスコ協会会長、元岐阜市教育委員長　「ぎふ平和のつどい」実行委員長(3回)」ほか

＜小学生3年からの英語教育開始について考える＞

最近、気になっている事が小学校における英語教育。小3で年間30時間を英語の授業に当て、中3になると、英語が国語の授業数を超える。英語は、出来るに越したことはない、何事も、出来ないより出来る方が良い。今後、日本の国力が弱くなると必要になるかも知れない、途上国で散見するように・・（涙）。

「日本人だから、日本語（国語）を学べ！」と、よく言われる。もちろん、それもあるが、日本語は、理解、記憶、思考に有利な文章構造を持っている素晴らしい言語なのだ。視覚（文字）と聴覚（音）から入る情報の定着度がそれぞれ異なる等の話は、また、別の機会にするとして。抽象的な事柄を表意文字（漢字）で見た（読んだ）時、多くの日本人は、発音(?)できなくても、その意味ならおよそ理解できる場合が多々ある。

私たち・日本人は、慣れすぎていて、気がつかないけれど、漢字は、抽象的思考の助けにもなっているのだ。また、その漢字の利便性に加えて、例えば、中国語のように全て漢字だけで書かれた文章と、日本語のように、漢字と平仮名の混合で書かれた文章のどちらがとっつきやすく頭に入りやすいかは、言うまでもないだろう・・私が、日本人であることを差し引いても・・。などなど、ややこしい話は、いつかゆっくり。

今後、学校教育においては、コロナで遅れた授業分を取り返すからと、夏休みを短縮し、行事も取りやめるそうだが、いったい「教育の何」をこなそうとしているのだろう？　授業時間数か？　それは、子どもたちの方を見ていない考え方ではないのでは？　と思う。

この際だから、指導要綱で小学3年生から始めようとした英語の30時間をすっぽり諦めたら、如何かと想像してみる。先生もきっと気が楽になる・・そうしたら、子どもたちに余裕を持って接しられるようにならないか？「英語の発音」に母語並みを求めるなら、9歳、10歳で発音を習っているのでは、もう遅い。だから、遅くなりついでに・・。

小3の頃は、精神的発達著しく、思考力を身につけるに最も大切な時期だ。その時を英語（嫌いになるといけないので、遊びを交えるとか・・）を学ばせる以上に、するべきことがあるだろう。ましてや、今年の状況で・・と考えるのは、間違っているのだろうか？

平井さん提供　月下美人

○　古川秀昭（ふるかわひであき）
＊画家、OKBギャラリーおおがき館長、前岐阜県美術館館長、
モダンアート協会会員・日本美術家連盟会員

＜コロナウイルス禍と一人ひとりの新しい生活の始まり＞

新型コロナウイルスが拡散し、無言のうちに社会が変えられるような不気味さがある。

しかし世界中で経済活動が一時休止した今、空気が浄化され、夜には数えきれない星が本来はあんなに光っているのだと驚く。「空気がきれい」「星が輝く」に気づくと、次元の低い国内外の政治の現実にあっても、生きる意欲や勇気、あるいは悩む力が少し出てくるかもしれないのだ。

私が言いたいことは、社会の矛盾や政治経済をみんなで考え、住み良い社会に変えていく大切な営みと、ほぼ同等の各個人、一人ひとりにしか味わえない「美しさ、醜さ」「愛、悲しみ、怒り」を感じる「感性」の大切さについてである。

3月から始まって6月中旬の今まで、自粛、ステイホームの安倍政権による呪文に、「コロナウイルス禍自粛生活」で失われた大切なものの一つは「個人の感性」だったろう。もちろん「個人の感性」はそう簡単に失われはしないが、なぜかそういった視点からの提案はなかった。私は5月1日に関東と東海の新聞に「自粛生活にあってこそ美術館に行こう」と記事を寄稿した。それは緊急事態にこそ美術館博物館の使命があるからだ。そこで働く学芸員は英語でcuratorという。もとになる言葉curateやcureには「助ける、癒す、救済する」という意味があり、この異常自粛事態にこそ大いに役立たねばならないからだ。

その記事掲載の4日後、5月4日政府と東京都の自粛一部解除に美術館博物館が含まれた。もともと美術館博物館は災害時や緊急時でなくても現代人の避難所でもあるからだ。私の提言は3密を避けながら「外(美術館)へ出かけよう」であった。具体的には軒並み休館だった全国美術館の「混む企画展ではなく、常設展示室を早く開館せよ」である。するとこれまで「美」に無縁であった多くの人たちにも、国内に1000以上ある近場の美術館・博物館(資料館を含めれば約5000館)へ行って、「ビックリしたり感動したり」する機会になるかもしれないと願ったからだ。

私たちが生きていく上で常に「美と愛」が大切だ。どんなに社会改革が進んでも、一人ひとりが家庭や職場や地域社会での人間関係に「美」と「愛」を感じる心がないならば、本当に生きている自由と喜びの実感はないだろう。これからでも遅くない、マスクをして家族や数人の友人で美術館に出かけてみよう。自粛生活で少し出始めた窮屈感や行き詰まり感の解消にもなるかもしれない。そこには私たちの税金で収集された優れた作品資料が展示室と収蔵庫に溢れているのだ。今こそ「愛」と「命」に潜む「美」に少しだけ心を向けてみてはどうだろうか。

みなさんからの投稿

○　**＜わが身にかける警告の言葉：**
喉元過ぎれば熱さを忘れる！＞

私は、二十数年前に胆のう切除手術を受けて以来、健康には自信があったのであるが、その過信がたたってか、本年コロナ禍のさ中、腸閉そくの手術を受ける羽目になった。精密検査入院後、退院するまでの24日間は実に苦痛で死ぬような思いをしたのであるが、幸い総合診断力のある医師団と看護師さんたちの献身的な治療と看護のお陰で、生還できたように思う。

しかし、元気になると「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で、入院中断酒を誓ったにもかかわらず晩酌も始めたいと思うようになり、我ながらあさましい「健忘」振りに、はっとなった。こんなことでは、コロナ禍と戦ってきた仲間たちに向かって、「ポストコロナの教訓を学ぼう！」なんて言えた義理ではない。唯々自戒するのみ。今の心境は、「吾、唯、足る、を知る（京都の古刹にある御手水盤）」である。

しかし、まだ「コロナ戦争」は終息したわけでもなく、勝利には程遠い。「コロナ戦争と敗戦」から炙り出された、我が国の脆弱な政治・社会体制を厳しく検証せねばならない。人の生命と自然環境を大事にしない、経済成長一点張りの「新自由主義・資本主義国家」を解体し、新しい思考で、新しい国造りを急がねばならない。それが実現して、初めて「コロナの教訓」を学ぶことができたと言えるのではなかろうか。

(島田)

○政府は新コロナ禍に対する経済面の対応で、スピード感のある対策を行うと繰り返し言っていました。マスゴミもこの言葉自体は肯定的に捉えていたみたいです。自分はこのスピード感という表現に違和感を感じていて、なぜ単純に経済対策を迅速に行うと言えないのかなと思っていました。しかし、現時点で明らかになった穴だらけのデジタル申請、電通の中抜き問題などを見ていると、今の日本政府には迅速に対応できる能力がないことが解りました。政府もそれが分かっているので、スピード感という実体のない言葉を使用したのかなと思います。現状は、スピード感かつ対策感のある対策をやっているというのが本当のところでしょうか。このことは日本という国民国家の衰退と、敗戦を終戦と表現するような同調圧力が強く善悪、公正さより場の空気感が支配する日本社会の構造の問題点を表しているように感じました。

（たなか）

○1 月 2 日のメモ「気温が高いのに、干し柿にカビが生えてない」 毎年干し柿を作るのですが、気温が高いのでカビ生えて苦になっていました。 何で？カビが生えない？ 不思議に思いメモを残しました。 電子顕微鏡の世界ではもう何か異変でも起きていたのだろうか？

現在の社会は人が作り出した電磁波が日常の経世済民に多用されています。 地下 3mから地上300m程度の環境は自然界には存在しない電磁波で覆われて いるといっても過言ではないだろう（俺の主観・検証したわけではない）。 赤外線であれば、体温上昇を起し死滅する生物もいるのでは、紫外線では細胞 の修復や増殖ができなくて死滅する生物もいるのでは。気づいた時には、俺たち人間も子孫を残せなくなっているかも。

人が作り出した赤外線や紫外線で覆われた電子レンジの中で俗の文化生活にするか、電子レンジの外に出てルネッサンスするか、俺・各個人が選択するの も面白い。 従前にあった自然は電子レンジの中にはおそらくないだろう。 電子顕微鏡でのぞけば、ずいぶんさまがわりしているのだろう。 早々、あまり見かけなかったコロナがずいぶんいるのだろうな。

（こうこうぶん わへい）

○　＜自然の価値を再考する＞

今年4月から、静岡県富士宮市に家族と離れて赴任する身となり、時を同じくして外出自粛が始まり、現在も県外移動自粛が続いています。心と体のリフレッシュを兼ね、沼津市を訪ねて、スクーバダイビングによる海中自然環境観察をしてきました。ほぼ毎年通っていた海ですが、外出自粛を受けてダイバーが海に入っていないせいか、一部の浜辺が海藻に覆われている状況を目の当たりにしました。

私たち人類の起源と言われている海中の小さな生物は、密閉、密集、密着することで、「種を保存（命の連鎖）」「生態系の均衡」を保ってきました。新型コロナウイルスは、洞窟に密集して棲息するコウモリが保有する感染症に由来すると言われています。

本来、自然界の多くの生き物は「密閉、密集、密着」という術で生命をつないできたはずです。
この災禍により、自然界で過ごす術から遠ざかった人類に対し、自然界が「自然の価値」とは何かを多角的に再考するよう呈示していると感じました。

以前、吉田ゼミで「自然の価値」の修士論文を書いた者として、今後も、皆さんとともに哲学してゆきたいと思っています。

（Tezzy）

○　＜コロナ禍の今だからこそ熟考したい＞

5月中旬フィリピンの新聞ラップラーが、「マニラの警察官が売春婦を搾取」との見出しで、新型コロナ対策のロックダウン下で起きた小さな事件を報じ、日本でも日経新聞が伝えた。内容を紹介できないが、記事はコロナ不況と地域封鎖を監視する体制が続く中での人権侵害と腐敗を告発している。

日本でも、風俗店とかナイトクラブなどでのコロナ感染が問題になってきた。私自身は「夜の街で働く女性」について特に推し量ることもなく、「感染したら自己責任」という程度にしか考えてこなかった。しかし、近年シングルマザーや母子家庭がめずらしくなくなった中、今一人親たちの家計が大変なことになっているという。

昨年離婚しこの4月来大幅に収入減となった若いお母さんが、最近コンパニオンとして働き始めたという。彼女はその少し前、「上の子は学校が閉鎖で、学童も預かってくれない。下の子も保育園が預かる条件を厳しくしたため行けなくなった」と話し、「『もう働くな！』ということか」と憤っていた。

先日妙な軽のワンボックスが神田町などを流していたのを見かけた。ボディーにはキャバクラ嬢？のイラストに「メール一本で超高収入」と書かれ、アップ・テンポの音楽もかかっていた。彼女らに対し「かわいそう」という言葉は不適当だとは思うが、誰にとっても最低限「人間の尊厳」が守られる契約下で働ける社会でありたいと切に感じる昨今だ。コロナ禍は特に重荷を背負った層を更に生きにくくしている。今こそ考える時だ。

（フィリピン・ウオッチャー）

○　＜ことばとつながりと・・＞

難しいことばが出てくると考えたくなるのは前世からか。漢字からアルファベット文字まであります。漢字で済ませられないものもありますが、アルコールは酒精とか言っていました。物の名前は仕方がないにしても、ソーシャルディスタンス(WHOはフィジカルディスタンスとか)など、社会から距離を置くのかと。増々ひきこもるのかと。感染しないように間隔を持つ感覚を！などとすればどうでしょうか。

国際協力のためには、各国で理解されるような状態を表すことばと関係を作りだすことでは。健康、福祉と生活を守る仕組みを、作り直すことになる。それにはよく聞きあうことが必要でしょうか。お上に頼るのを遠慮してきた方々は自信を持っていいの

です。とも難儀ということばがあります。粛々と湧き出ることばはやはり人間どうしの深まりが大切だと示しています。つきあいを〇割減らせと言われても、少人口では人々と生活を維持してきました。作物や小動物と農耕接触でした。

（野口）

○ ＜ウイルスと人類のカンケイ＞

相手を知ることで、正しく恐れて適切に行動できます。ウイルス学者の山内一也氏（88歳）のTV番組での知見を紹介します。 1.「生命の1年歴」では、ウイルスの出現は5月初め、人類のそれは12月31日の最後の数秒。勝つとか負けるとかの相手ではなく、まったく違う存在。ウイルスから見たら、人類なんて取るに足らない存在。 2. 我々の遺伝子であるヒトゲノムの4割ぐらいは、ウイルス。我々の中で、人とウイルスは一体化している。つまり、完全に身の内で、人とウイルスの区別はつけ難い。 3. 腸内細菌は、約100兆個いて、1個の細菌に10ぐらいのウイルスが寄生している。つまり、腸内だけでもウイルスが1000兆個もいる。皮膚・粘膜に寄生する膨大なウイルスもいる。病気をおこすウイルスだけではない 我々は、ウイルスに囲まれ、ウイルスと共に生きている。 4. ウイルスの自然宿主では、ウイルスは共存を図っている。〔 例：インフルエンザウイルスと鳥類、コロナウイルスとコウモリ（哺乳類）〕 5. キラーウイルスと呼ばれる悪玉ウイルスの側面は、人間がつくりだした現代社会のみで起きている。 以上から、「敵対」でなく「共生」の道を説かれました。

（ Dr. ZEN ）

○ ＜自由なコミュニケーションの大切さ＞

今回のコロナ禍で私が最も強く感じたことは、普段当たり前に享受している自由の大切さである。今回、自身そして身の周りの人たちの健康を守るために活動を自粛することはやむを得ないことであった。しかし、それにより行動の自由やその前提かつ目的でもある精神の自由に関わる活動は、多少なりとも制約される状態となってしまった。

私にとってこれは考えていた以上に辛いものであった。友人に会えない、映画館にいけない、登山もできない、スポーツ中継も観られない・・。そして、実際に会い、経験を通じたコミュニケーションができなくなってしまうと、オンライン上でのやり取りのみによるコミュニケーションは人間関係を構築する上で十分なものといえるのだろうか、という疑問をもってしまう。

安易な安心を得るために自由を犠牲にしてはならず、当たり前に享受する自由のために不断の努力が必要であることを再確認したい。と同時に、本当に安全を確保する上でソーシャルディスタンスが必要なときのために、自由がある限り、オフラインで実際に会い、ともに経験を共有したコミュニケーションが今後更に重要になるのではないかと思う。

（T・C 27歳）

○ ＜オンライン学習会「ZOOM」に参加して＞

先日はオンライン学習会（ZOOM）に平和団体の誘いで参加した。コロナ禍以来、集まることを避ける傾向が強く、今後はオンラインによる会議、学習会、営業が主力になり、我々も慣れることが求められている。

今回のテーマは「馬毛島を米軍基地にするな！」でした。馬毛島は鹿児島県種子島のすぐ西12Kmの島で、かつては500人程が住んでいたが1980年に無人島になった。2011年5月防衛庁は、既に世界遺産の屋久島など周辺自治体の強い反対があったが、馬毛島を米軍基地候補として発表。そして2019年1月に160億円で所有者から買収、米軍基地の滑走路建設が進んでおり、私にとっては大変衝撃的な話でした。

米軍はFCLP（滑走路を空母の甲板に見立てて離着陸を繰り返す飛行訓練）を三沢、横田、岩国基地で実施していたが地元の反対が強く、2011年

以降は3基地では実施していない。1991年から硫黄島航空基地（東京都）での実施だが、厚木基地から1200Kmと遠く、米国から硫黄島より近い基地の要求があった。

FCLPは基地周辺の住民には耐えがたく「内臓がひっくりかえる」「鶏が卵を産まなくなった」と言われる強烈さで新たな基地など決して許されない。今回は「日米安保とは何か」を改めて思い知らされるとても勉強になった学習会でした。

（井口篤郎）

○　＜自然再生に挑む＞

つれあいの畑からはすでにキュウリやナス、オクラにミニトマトなどの夏野菜が収穫され食卓にあがる。My畑の野菜たちは背丈が100cmにも届いていない。収穫物はゼロ。不耕起、畝を緑肥で覆うという栽培法ではじめたMy畑。最初の年はカメムシ、ウリ葉虫がびっしり！　気色悪くてすべて引っこ抜く。生ゴミと落ち葉や草＋糠でたい肥を作る。畝に落ち葉や草を、その上にたい肥を軽く撒く。テントウ虫やカマキリが来てくれたが、まだ気色悪い芋虫も健在。この冬カマキリの卵が2個あった。冬野菜は十分にいただく。るんるん気分で5月、夏野菜を植える。つややかなミミズがいっぱい。・・なんちゅうこっちゃ、地下ではモグラ、地上ではキツネが大あばれ。あわれ！　穴ぼこの畝のそばにプランターをおき再出発。虫のバランスはとれてきた。今はもっとでっかい動物たちのバランス、生態系の復活の一場面かと期待するが、どうだろうか。

（尚）

○　＜力がないことが優位性＞

イージスアショア配備断念の次は、それに替えて「敵地攻撃能力」の議論を始めると自民党。コロナ禍から何も学んでいないのかとあきれ、怒りを感じます。

京大総長の山極寿一氏は、憲法9条で武力を持たない日本はプラットフォーマーとしての役割を果たすべきであり、それを示していくことが日本の国際貢献のあり方である。力がないことが優位性であると述べています。「力がないことが優位性」――なんてステキな言葉でしょう！

コロナ禍で軍備にお金をかけることでは全く国民を守れないことを思い知らされ、医療、教育、介護、子育てなど公共財にお金をかけることが国を守ることであり、これこそが憲法にかなった国のありようだと確信がもてました。力を持たないことに自信を持ち、世界に示していくことが、何よりの国際貢献であり、世界を分断から解き放つことができるのだと思います。

（あつこ）

○　＜むち(鞭)打ち　罰金を避けた日本 (2)＞

麻生副総理、財務大臣はこの状況を「民度のちがい」と言い、西欧首脳から「何をゆう(言う)とるのや」と批判された。私ももちろん「民度の違いである」と考える。まさに、この時点でこの事柄に関して、歴史の隙間に偶然できた「民度の違い」である。

日本は感染者が少ないことについて、麻生さんの「民度」はその話を展開していくと、古い形の「民族主義」につながっていくだろうと推測される。私の「民度」は、展開していくと、新しい時代の「民主主義」へとつながっていく「民度」である。歴史の隙間に偶然できた弱い「民度の違い」であるので、国民(市民)も上に立つ者も、強い意志と願望で強めるよう進めれば押しつぶされない民主主義として発展するだろう。

(アダム・スミス)

【コロナ時代の読書案内】　＊この時期に奨めたい書籍を少しだけ紹介します（吉田千秋）

○ A・カミュ『ペスト』（宮崎嶺雄訳、新潮文庫）
何と言ってもまず第一にこの名作を。突然襲ったペストで完全閉鎖された小都市で、この不条理にどう立ち向かうのか。一人ひとりの生き様が見事に表現され、自分自身に問いかけてくる。

○P・ジョルダーノ『コロナ時代の僕ら』
（飯田亮介訳、早川書房）
いち早く感染爆発したイタリアで、これをどう受け止めたのか。人気小説家のエッセイを編んだもので、軽妙でかつ明晰。根本は、「ボクが忘れたくないこと」であり、それは何か。

○ NHK取材班『ウイリス VS 人類』（文春新書）
この間、内外の様々なドキュメントが映像で流され、多くを学ぶことができた。これはその一つで、NHKで2月と5月に放映された専門家達の座談会。新型コロナの問題群がよく分かる。

○ J・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄（上・下）』
（倉骨　彰訳、草思社文庫）
感染症と人類の歴史についての古典的な書物の一つ。ちょっと大部なもので、しんどいですが、こういう時にぜひじっくりチャレンジしたいものです。

○石　弘之『感染症の世界史』
（角川ソフィア文庫）
日本の研究者の総括的叙述としては一押しの本です。人類と感染症の長いつき合いと共に、特に日本での感染症の歴史が具体的に示され、たいへん読みやすく、示唆に富んでいます。

○ 詫摩佳代『人類と病』（中公新書）
これは最近に出版されたもので、天然痘・ポリオ・マラリア・エイズ・エボラ・新型コロナとの世界的な対応を追うと共に、WHOなどの世界的な機関や国々の協力の格闘と葛藤が記され、展望が示されています。

○飯嶋和一『出星前夜』（小学館文庫）
同『狗賓童子の島』（小学館文庫）
世界的にはノーベル文学書作家のJ・クレジオ『隔離の島』が知られているが、歴史小説作家の飯嶋氏のこの二つの作品は、島原の乱、隠岐島の乱を背景に、どちらも感染症との格闘を通して前向きに生きる壮大な物語です。

○ プレディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）
ちょっと毛色の変わった本ですが、コロナ時代の重要課題の一つは、多様な人たちとの交流・対話です・・特に日本では。この本はそれについての大切なヒントを提供してくれます。読みやすいですから、ぜひ。

＜世界一週貧乏旅　その12＞「コロナビール」

みなさまビールはお好きですか？　夏の暑い日にキンキンに冷えた生ビールは、まさに五臓六腑に染み渡る美味しさと言っても過言ではありません。
そんな美味しいビールも、今日のコロナ禍のせいで良くも悪くも影響を受けてしまった銘柄があります。スーパーなどでもよく見かける、黄色が特徴的な「Corona」と書かれたメキシコのビールをご存知でしょうか。
コロナビールはその名前のせいで一時風評被害（本当はデマ）も見られ、「2020年1月～2月だけで約810億円の売上が失われた」、「ビールを飲むアメリカ人のうち

『現在はいかなる状況下でもコロナビールを買わない』と回答した人が38％に上った」など一時話題になりました。

しかし、坂口孝則氏の「コロナビール＜実売値＞に見えた風評被害のウソ」という記事によると、コロナウイルスの感染拡大によって、むしろ「コロナビール」の売り上げは上がっているという検証結果が出たのでした。理由としては、「コロナ」の名前を皆が口にすればするほど、無意識的にコロナ「ビール」の購買へ繋がるということと、ビールのファン達がこんなときこそ買い支えだと、購買選択に影響を及ぼした可能性があるためだと言っています。僕自身もこのビールのファンであり、スーパーのお酒コーナーでビールを物色していた際、応援の気持ちからコロナビールをあえて買うなどしていたため、坂口氏の主張は納得できるものだと感じました。

さてそんなコロナビールは、軽めの味でビールとしての苦味も強くなく、ごくごくと飲み干したくなる味わいです。くし形切りにしたライムを瓶の中に押し込んで、柑橘の酸味と香りを付けて飲むとなお良し。そしてどうせなら夏の天気のいい日に外に出て、355mlの瓶の栓を抜き勢いよくラッパ飲みしてください。

僕がワーキングホリデーでイギリスに住んでいた頃、真夏の珍しくカラッと晴れた日に自然の綺麗な公園へ行き、音楽を聴きながらラッパ飲みしたコロナビールは最高の一言でした。おすすめです。

CMみたいになっちゃいました、でもおすすめです、コロナ・ビール。

（カモノハシタニ）

＜この一本＞ ジョン・チェスター監督 『ビッグ・リトル・ファーム』（アメリカ2018年）

中学校時代に『怒りのぶどう』は、アメリカの凄まじい砂嵐のために、多くの農民が西部へと移動し没落していくことを書いた本と聞いた。読むことなく55年すぎる。私が岐阜に来て、土と向き合うようになり、ディビット・モントゴメリーの『土シリーズ』3部作を読みだす。土を耕すことが土壌の流出となり、文明を消滅させてきたというびっくりする内容に、ハッとして『怒りのぶどう』も読みだす。うなされながら・・。
そして、緊急事態宣言がとかれ、久しぶりに映画館へ行き、“ビッグ・リトル・ファーム”というドキュメンタリー映画を観る。

殺傷寸前の犬と暮らしたい夫は、安全な野菜で料理したい妻の願いを実現するために、ネットで投資を呼びかける。30万ヘクタール！！の農地を買い、人手もネットで募集。土壌学者のような人の協力も得られて。アメリカという国の不思議さを思う。その農地というのは、いくつもの丘が連なるほど広大で、見渡すかぎり灰色の丘。セメントで固めたようにカチンカチンの大地。耕作不能になれば、その地を捨てる。土地は生産手段の一つにしかすぎない。日本のように先祖代々の土地という思いはないのだね。

そんな土地が8年間の実践で、鷲、フクロウ、コヨーテを頂点とする生態系ピラミッドがつくられ美しい農園になっていく。75種類4500本の果樹を植え、鶏、水牛の角をもったような牛、羊、渡り鳥でない鴨（？）、豚を放す。その過程でぞっとするほど鳥や虫の大量発生がおこる。だが、その都度動物たちが解決しバランスが保たれていく。鶏たちが肉食動物に何百羽と襲われるも、コヨーテとも共存できるのではととらえる。

8年目、大勢の見学者たちを招くツアーがもたれ、鶏の卵や果物の販売日には人の行列ができる。8年でここまで自然は回復し循環しあうのかと驚く。土、水、大気のなかで生きる生き物は太陽のエネルギーをいただき、ひとつのまとまった仕組みと働きをつくっている。そういう能力を地球は秘めていると思った。それは愉快すぎるほどだった。同時に感慨深いものだった。おすすめしたい映画です。

（バンク）

2020年後半 哲学カフェ、第25期の予定

場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

例会は19:00～21:00です。

＊定例会は、岐阜市八代の「ふれあいスペース」で7時からですが、状況次第で、会場と時間については、変更があります。主宰（吉田）やHPなどで確認願います。

第146回例会 8月13日（木）	**「コロナ危機と気候危機をつなげて考える」** ＊コロナ危機で、痛めつけられ、傷つけられた自然が少し「回復」した。 ＊「人災」の気候危機による自然破壊がコロナ危機を生み出したのではないか。
第147回例会 9月10日（木）	**「大学入試など、日本の教育問題を考え直す」** ＊来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出でご破算に。 ＊さらにこの間、教育のありかたが根本的に問い直されざるをえなくなった・・。
第148回例会 10月8日(木)	**「今後の日本の労働のあり方を考える」** ＊コロナ禍対策で浮上したのは「テレワーク」という「新しい様式」だけでない。 ＊苦境に陥れられた非正規労働者、フリーランサー等の抜本的改革が必要である。
第149回例会 11月12日(木)	**「世界の行く末を考える―米大統領選の結果をみて」** ＊11月3日にアメリカの大統領選挙が行われ、トランプ再選なるかが焦点。 ＊この結果は、世界の政治・経済に重要な影響を与える。さてどうなるのか。
第150回例会 12月10日(木)	**7月に開催できなかった12周年記念行事を行う方向で準備する。** ・・「コロナ危機後の世界を考える！」というようなテーマで

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

＜7月例会の案内＞

●7月例会は、コロナ感染リスクを避けるため
会場を北部コミセンの大集会室に移します。
（右の地図参照・駐車場は建物の北側です）

日時　7月9日(木)　午後7:00 ～ 8:45
テーマ「コロナ危機から何を学んだのか？」
（「通信」No.143＆No.144 参照）
会場：「岐阜市北部コミュニティセンター」

＊いつもの会場「ふれあいハウス」は、密が避けられないので、会場変更します。
＊「ふれあいスペース」から南へ約300メートル、信号を西に約100メートル
〒502-0812 岐阜県岐阜市八代1丁目11-13
電話 058-233-2110
＊部屋は「大ホール」です。大きな空間なので安心です。
＊マスク着用、飲料水持参。体調が悪い方はご遠慮下さい。

例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です